

群 教 セ	G10 - 01
	平17.227集

高齢者や障害者に対する 思いやりの心を育てる道徳指導の工夫 — 総合的な学習の時間や美術科と関連させて —

特別研修員 黒島 清美 (太田市立東中学校)

《研究の概要》

総合的な学習の時間ではブラインドウォークや車椅子体験などの体験活動を行い、美術科の時間ではユニバーサルデザインを描くという題材を扱った。その上で、体験活動とユニバーサルデザインで学んだことを生かした道徳の実践を行った。具体的には、道徳1、2において、自分の体験と資料を比較して考えるような授業展開を取り入れ、資料の登場人物の心情に深く迫る工夫を試みた。

キーワード 【道徳 中学校1年 思いやり 体験活動 ユニバーサルデザイン】

I 主題設定の理由

子どもたちを取り巻く環境を考えてみると、昔に比べ様々な世代の人と接する機会が少なくなっている。本学級の生徒も、高齢者や障害者と直接接した経験が少なく、日常生活の中で様々な立場の人の気持ちを実感する機会も多いとは言えない。実際、本学級は特殊学級の生徒の親学級であり給食や学校行事などで共に活動する場面があるが、生徒たちは身構えてしまったり、敬遠してしまったりと、上手に人間関係を築いているとはいえない。だからこそ単なるあわれみや同情ではなく、相手に対する深い理解と共感を根底とする思いやりの心を育てることが大切であると考えた。

また、教師としての立場から今までの実践を振り返ってみると、学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行うということを必ずしも有効に行っていない現状がある。そこで、美術科の題材と総合的な学習の時間を道徳と関連付けながら、実感を伴うことができるような方法を用いて子どもたちの思いやりの心を育てていきたいと考えた。

1年生の総合的な学習は「『太田市改造計画』だれにでもやさしい太田市をつくろう」というテーマで行っており、ブラインドウォークや車椅子体験、高齢者の疑似体験などを通して、様々な視点から生活環境を見直し、それぞれの立場の人にとって暮らしやすい町とはどのようなものかを考えていく。また、美術科では「ユニバーサルデザイン」を取りあげて、高齢者や障害者が使って

たいと思うような道具を考え、デザインする活動を行う。

そこで、総合的な学習の時間の体験活動や美術科の「ユニバーサルデザイン」と道徳の時間とを関連させることを通して、表面的な言葉としての「思いやり」だけではなく、同じ人間同士として相手を思いやる心を育てることができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

道徳「他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつ」[2-(2)]において、総合的な学習の時間「『太田市改造計画』だれにでもやさしい太田市をつくろう」での体験活動や美術科の題材「君はユニバーサルデザイナー」と関連させていくことが、思いやりの心を育てることに有効であることを明らかにする。

III 研究の見通し

1 道徳の時間1 主題名「思いやりって何」(資料「福祉体験学習に参加して」)において、総合的な学習の時間に行った障害者の体験を基に作成した心のつぶやきシートを活用して、行動を制限されることの大変さを実感し相手の立場に立って考えることで、相手を理解し共感する気持ちをもつことができるであろう。

2 道徳の時間2 主題名「思いやりから動き出す」
(資料「父ちゃんはエジソン」)において、美術科の題材「君はユニバーサルデザイナー」でデザインしている自分と実際に道具を作っている父ちゃんを比較することによって、相手の立場を尊重しながら自分にできることを考え行動に移そうとする思いやりの心を育てることができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 思いやりの心の育成について

本研究においては、高齢者や障害者など社会的に弱い立場に立たされやすい人たちに対しての、思いやりの心を育てたいと考える。社会的に弱い立場の人に対する思いやりといった場合、ともすれば自分は上の立場から相手をかawaiiそうに思っている「〇〇してやる」という姿勢になってしまうことがある。「中学校学習指導要領 解説―道徳編―」によれば、「思いやりの心の根底には、人間尊重の精神に基づく人間に対する深い理解と共感がなければならない。このように考えれば、思いやりの心は、単なるあわれみや同情と考えられるべきものではないことが分かる。」とある。

したがって、高齢者や障害者への思いやりの心をもった生徒とは、①相手の立場や気持ちを理解し共感することができる生徒、②相手の立場を尊重しながら、自分にできることを考え、行動に移そうとする意欲をもっている生徒であるにとらえた。

(2) 総合的な学習の時間の体験活動との関連について

総合的な学習の時間「『太田市改造計画』だれにでもやさしい太田市をつくろう」では、高齢者や障害者の疑似体験活動を行い、それぞれの立場で自立した生活を送るに当たっての問題点を考え、環境を改善する視点をもつことをねらいとして学習している。

具体的には、目が見えない状態を体験するブラインドウォーク、足が動かず活動できる範囲にも制限がある車椅子体験、足腰や筋力が弱くなり視力も落ちてくる高齢者の疑似体験を行い、それぞれの立場で様々な生活の苦労があることを知る。このときの体験で感じたことは心のつぶやきシートに記入する。また、そうした立場の人たちも含

めて、だれもが自立して生きていけるような町をつくるにはどんな工夫が必要かをハード、ソフト両面から考える。

道徳の時間では、総合的な学習の時間の体験を基に作成した心のつぶやきシートや活動の様子を撮影したビデオを活用する。それらを基に障害者の立場に立って考えることによって、行動を制限されることの大変さを感じ取り、障害のある人の気持ちを理解し共感することができると思う。

心のつぶやきシートとは、吹き出しに、障害のある人の立場とそれを介助する人の立場で感じたことを記入するワークシートである。

(3) 美術の題材「君はユニバーサルデザイナー」との関連について

生活を豊かにするためのデザインは、使いやすさと美しさ(用と美)を兼ね備えている必要がある。特に近年は、障害の有無に関係なくだれもが使うことができる道具や建築などを扱ったユニバーサルデザインへの理解が広がってきている。「君はユニバーサルデザイナー」では、私たちの身の回りに実在するユニバーサルデザインを調べたり鑑賞したりした後で、高齢者や障害者が「ぜひ使ってみよう」と思うような生活用品をデザインし、ポスターを制作する。この活動を通して相手の立場を尊重し、思いやることの大切さに気付くことができると思う。

道徳の時間では、生徒がデザインした作品のアイデアスケッチを活用する。障害のある人のためにボランティアで道具を作り続けている人物に焦点を当てた資料「父ちゃんはエジソン」と、生徒自身のアイデアスケッチを重ね合わせて考えることで、人のためにものを作るものの意味や、人のために行動することの大切さに気付かせることができると思う。

(4) 全体構想図(資料1)

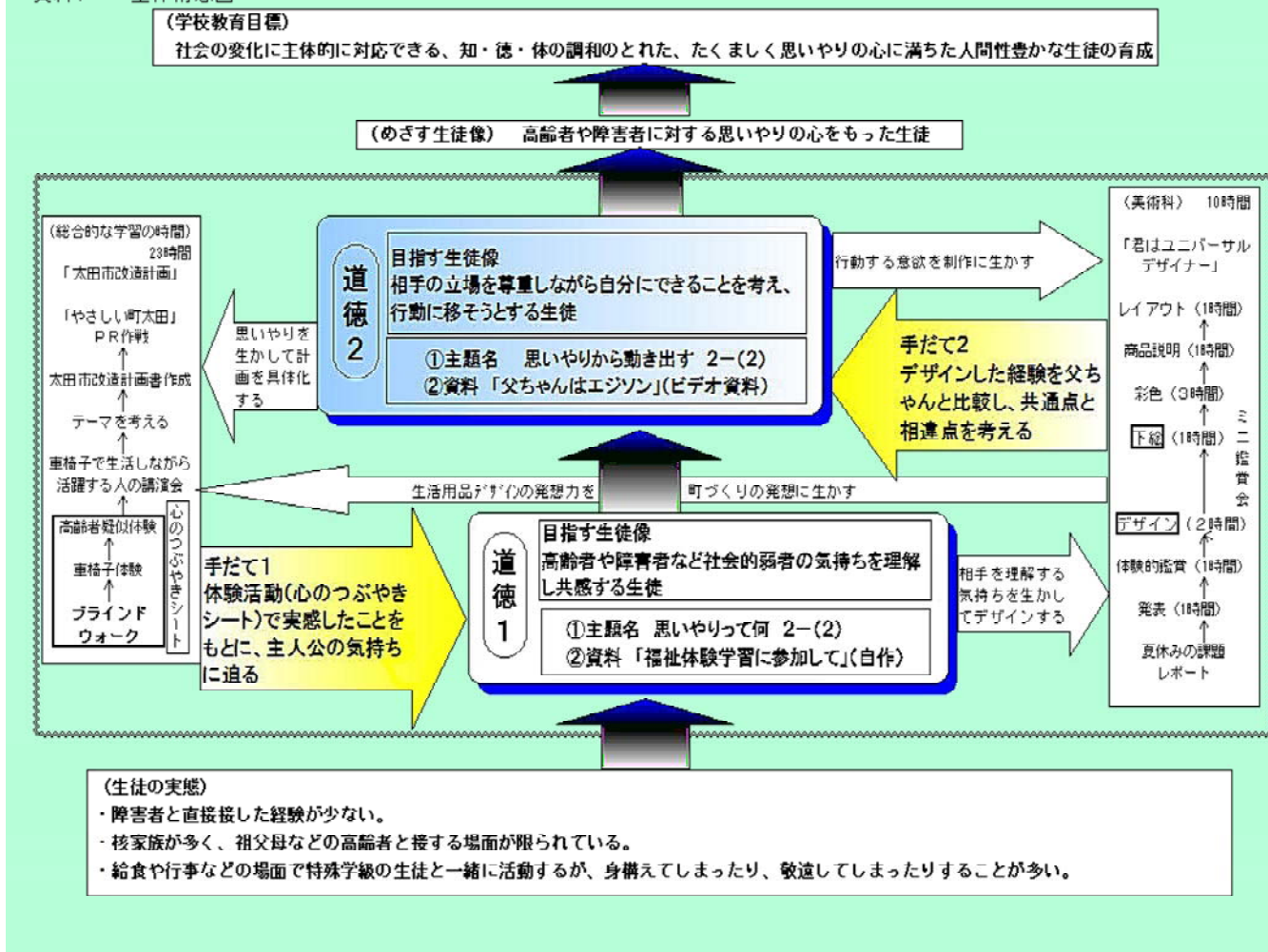
2 実践の概要及び結果と考察

(1) 相手を理解し共感する気持ちをもつことができたか。(見通し1)

ア 実践の概要

総合的な学習の時間において、ブラインドウォーク、車椅子体験、高齢者疑似体験を行い、それぞれの体験後に体験を通して感じたことを心のつぶやきシートに記入した。心のつぶやきシートの記入欄は吹き出しの形とし、障害がある側として感じたことと、それを介助する側として感じたこ

資料1 全体構想図



とをそれぞれの立場に立って書けるように工夫した。道徳の時間では、心をつぶやきシートに書いたことを基にして、目が見えないとどんな気持ちになるかを発表した。発表を通して目が見えないことの大変さをとらえた上で、資料「福祉体験学習に参加して」を読み、目が見えない登場人物の「私はかわいそうな人じゃありません。」という言葉から本当の思いやりとはどんなことなのかを考えた。その後、自分の考えを吹き出しの形のワークシートに記述して発表し、意見交換することで考えを深めていった。

イ 結果と考察

総合的な学習の時間に行ったブラインドウォークでは、体験後に書いた心をつぶやきシートに全員が何らかの場面で「恐かった」という感想を書いた。その他「目が見えない人は大変だ」「目が見えない人の気持ちが分かった」という記述も多く、実際に体験することによって目が見えないことの大変さを実感した様子であった。

体験を受けて行った道徳の授業では、最初にブ

ラインドウォークを撮影したビデオを見て、このときの感想を発表した。生徒は心をつぶやきシートを参考にしながら「広い場所ではどこから階段が始まるのか分からなくて恐かった」など実際の体験を通して感じたことを発表した。

体験から実感したことをおさえた上で、実際に目が見えない人に出会ったらどんな気持ちになるかと投げかけると、生徒からは「あんなに大変なんだから、それが毎日続くななんてかわいそう」という発言があった。さらに、資料に登場する目が見えない登場人物に対しても自分の体験と比較して考えており、生活する上での苦労や大変さを想像することができた。

目が見えない登場人物に対してかわいそうであると思う気持ちと、登場人物自身の「私はかわいそうな人じゃありません」という発言を照らし合わせ、その発言の意味を考えたところ、「目が見えないことを個性の一つであると思っているから」「見えなくても工夫で乗りこえられるから」などの意見が出てきた。これを受けて、本当の思

資料2 イメージマップへの記述内容①(1、2回目の比較)

	1回目 体験活動及び道徳の授業前	2回目 体験活動及び道徳1の後
相手への理解や共感にかかわる記述	気づかう (5)	差別をしない (12)
	相手のことを考える (4)	見守ることも (9)
	ゆずりあい (2)	同情ではない (6)
	他の人のために (1)	障害者も同じように接する (6)
	みんなのことを思う (1)	相手のことを考えられる (5)
	老人をいたわる (1)	個性 (5)
		みんな平等 (5)
		相手を理解する (4)
		気をつかう (3)
		仲よくする心 (3)
		その人らしさを見つけられる (2)
		同じ人間と思う (1)
		いろいろな考え方を受け止められる (1)
		気付く (1)
		自分だけではない (1)
		気持ちのわかち合い (1)
		相談に乗る (1)
思いやりの実践にかかわる記述		人と比べない (1)
		見ただ目で決めない (1)
	手伝い (9)	困っている人がいたら助ける (16)
	助け合う (9)	ボランティア (11)
	ボランティア (7)	手伝う (10)
	募金 (5)	声をかける・話す (8)
	行動 (4)	助ける (7)
	手話 (2)	目が見えない人に道をあける (3)
	ゆずりあい (2)	じやまな物はどかしてあげる (1)
	友情の絵はがき (1)	バスや電車でお年寄りに席をゆずる (1)
	ゴミ拾い (1)	その人のために工夫する (1)
	力を貸す (1)	やさしいデザインを考える (1)
	老人の荷物を持つ (1)	実行 (1)
		人を思って行動 (1)
		荷物を持つ (1)
		手話 (1)

った道徳1の後に書き込んだイメージマップでは、相手への理解や共感にかかわる記述が68に増え、内容的にも「いろいろな考え方を受け止められる」などのように具体的な記述が増えてきた(資料2)。

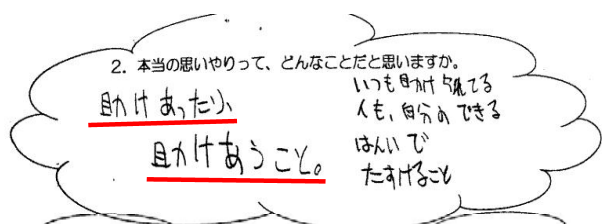
B子は授業の中で本当の思いやりとは「助け合ったり、助け合うこと」であると発言した。それはどういう意味だろうかと問いかけると「どちらかが一方的に助けるのではなく、場合によってお互いにできることをする」という答えが返ってきた。この発言からB子が思いやりを一方的な同情ではなく、お互いに行うものであるととらえていることが分かる(資料3)。さらに、B子は2回目のイメージマップに「個性と違って同じに接する」「本当に困っていたら声をかけてあげる」「他人のことを思って行動する」と書いており、まず相手の気持ちを考えることの大切さに気付くことができた。

A男は1回目のイメージマップでは「やさしさー思いー思い出」の後に「運動会、林間(学校)、臨海(学校)、楽しい、緊張、新潟、地震、台風」など思いやりからずれた記述

をしていたが、2回目のイメージマップでは「助け合う」「そっとしてあげる」「気持ちのわかち合い」「思い合う」「自分だけではない」など相手を理解しようとする記述をすることができた。また、1回目のイメージマップでは思いやりから直接イメージしていることが「やさしさ」と「感情」の2つだけであったのに対し、2回目では「心」「自分だけではない」「そっとしてあげる」「親切」などを含む9つの言葉をイメージしている。考えが広がった理由を尋ねると、A男は「思いやりは相手によって違うと思うから。いろいろある。」と答えており、人との関係の中で思いやりをとらえ、相手の気持ちを理解するという視点をもつことができた(資料4)。

これらのことから、総合的な学習の時間に行った体験活動を基に目の見えない登場人物の気持ちを深く考えたことで、思いやりは同情やあわれみといった一方的なものではなく、相手に共感し、

資料3 道徳1のワークシート(B子)



いやりについて考える場面では、生徒は「本当の思いやりはその人のことを見てかわいそうと思うことではなくて、あの人も私と同じ人間なんだ、あの人はあの人なりにがんばってるんだと思うことだと思います。」などを書いており、思いやりは同情やあわれみとは違うことを感じ取っていた。

また、「太田市改造計画」の始めに書いたイメージマップでは相手への理解や共感にかかわる記述が14であったのに対して、体験活動を受けて行

資料6 イメージマップへの記述内容③(ユニバーサルデザインにかかわる記述)

	1回目	2回目 道徳1の後	3回目 道徳2の後
ユニバーサルデザインにかかわる記述	車椅子 (5)	点字ブロック (3)	バリアフリー (9)
	点字 (4)	バリアフリー (2)	障害のある人に
	バリアフリー (4)	杖 (2)	便利な物を作る (5)
	自動ドア (1)	手すり (1)	点字ブロック (2)
	段差のない場所 (1)	スロープ (1)	実際に作ってみる (1)
	エレベーター (1)	電話ボックス (1)	少しずつでもいいから
	手すり (1)	エレベーター (1)	バリアフリーに取り組む (1)
	ユニバーサルデザイン (1)	やさしいデザインを考える (1)	段差を少なくする (1)
	公衆電話 (1)	お金をためて、 障害のある人の ために〇〇する (1)	点字 (1)

父ちゃんが試行錯誤しながら道具を発明する姿やできあがった道具を使っている人の様子を見ているとき、導入では笑顔を見せていた生徒たちの表情が真剣なものになっていった。

ワークシートの記述を見ると、父ちゃんと自分たちの共通点については「体の不自由な人のためにデザインしようとしている」「助けようという気持ち」などと書いている生徒がほとんどであり、自分たちも父ちゃんも障害者に対して何かをしてあげたいという気持ちをもっている点では同様であると感じ取っていた。また、父ちゃんと自分たちの相違点で最も多かった記述は「私たちは考えるだけだが、父ちゃんは実際に作っている。」というもので、何かをしてあげたいという気持ちを実際に行動に移す父ちゃんから、思いやりを行動に移す意志の強さを感じ取っていた。また、「体が不自由でもいろいろなことができるようになってほしい。」という父ちゃんの強い思いがあるから、アイデアを本当に形にする大変さを乗り越えているのを感じ取ることができた。

道徳2の授業後に書き加えた思いやりのイメージマップを見ると、それまではほとんど書かれていなかった「行動に表す。実践する」などの記述が見られるようになった。また、「なんでもかんでも手伝ってあげるのではなく、困っているとき、一人ではできないことを手伝ってあげる」などの記述に見られるように、実際にその場面を想像し、どんな場面でどんな行動をとればよいのかを具体的に考えた内容が見られるようになった。さらに「声をかける」「あいさつなどのちょっとした一言から」「聞こえにくい人のために声を大きくしてみる」など、ちょっとした心がけしだいですが

に実行できるような内容も増えてきたことが分かる(資料5)。

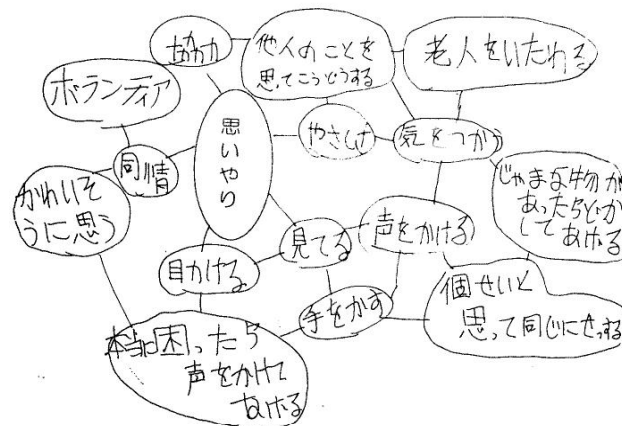
さらにイメージマップに書き込まれたユニバーサルデザインに関する記述を見ると、はじめは「公衆電話」や「自動ドア」など実在するデザインをあげているだけだったのが、道徳2の後に書いたイメージマップでは「障害のある人に便利な物

を作る」「少しずつでもいいからバリアフリーに取り組む」など自分たちの手でユニバーサルデザインを作っていこう、広げていこうという視点に変わってきた(資料6)。

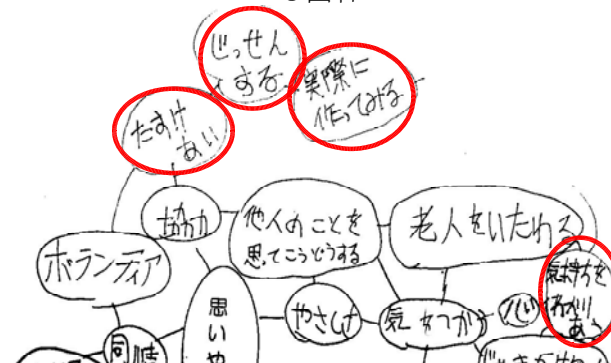
A男は授業の中で、思いやりからできることってどんなことだろうという問いに「実際に考え、行動に移す。体の不自由な人たちを同じ人として、(いろいろなことが)できるように手伝う」と答えており、気持ちを行動に移すことを大切なことであるととらえることができた。

資料7 イメージマップ(B子)

2回目

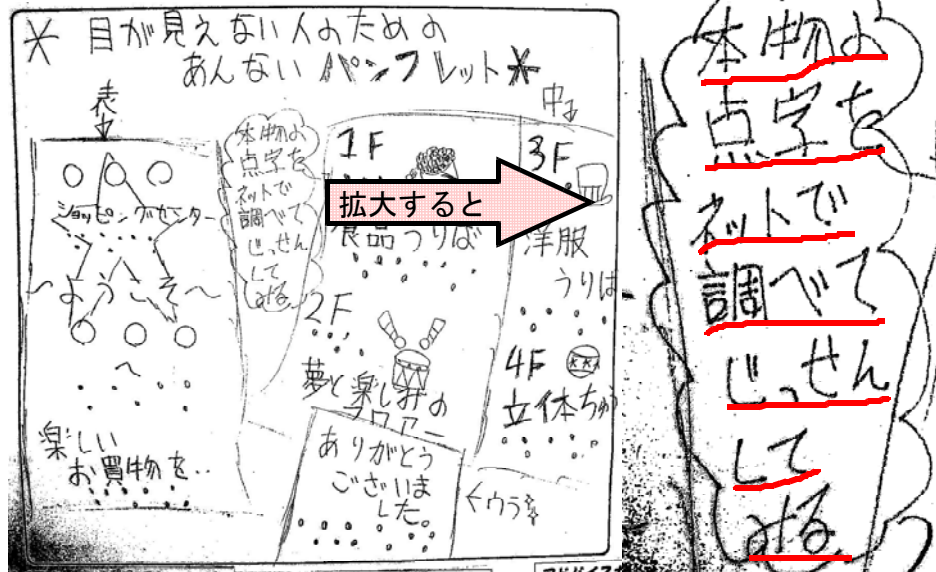


3回目



B子はイメージマップに「実際に作ってみる」「じゃまな物があつたらどかしてあげる」と書き加えている。このことから美術で描いたアイデアスケッチを実際に使えるように仕上げようという気持ちや、日常生活の中で自分にできることを実践しようという気持ちをもつことができたと言える（資料7）。実際に、B子は美術で目が見えない人のための案内パンフレットを

資料8 アイデアスケッチへの書き込み(B子)



描いていたが、道徳の授業後にそのアイデアスケッチに「本物の点字をネットで調べて、実践してみる」と書き加えた（資料8）。その後の作品制作では、実際にインターネットで調べた点字の資料を持参し、紙の表面に凹凸をつけた点字のパンフレット作りを行った。行動しようという気持ちを実際の行動に結びつけることができたと言える。

これらのことから、ユニバーサルデザインを描くことに挑戦している自分たちと、実際に道具を作り出している父ちゃんを比較したことによって、思いやりを実践することの大切さを感じ取ることができたと言える。

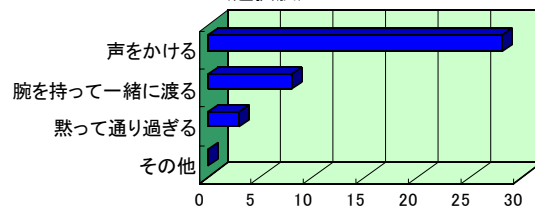
(3) 理解し共感する気持ちをもって、相手の立場を尊重しながら自分にできることを考え、行動に移そうとすることができたか。(見通し1、2を総合して)

ア 結果と考察

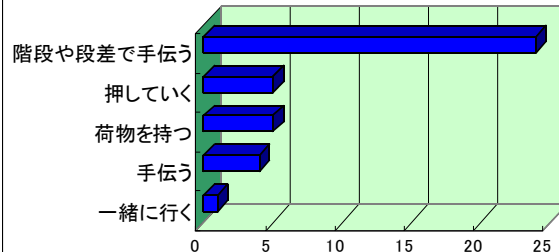
事後のアンケートで「街で目が見えない人が横断歩道を渡れなくて困っていたら、あなたは どうしますか」という質問に対し、声をかけるという生徒が39人中28人(約72%)であった(資料9)。その理由として、「話しかけてみて困っているようなら手伝う」と答えている生徒が最も多く、相手の気持ちを考えて行動しようとしていることが分かる。また、「車椅子の転校生が来たら」という設定で教室移動の場合と清掃の場合の質問をしたところ資料10、資料11のような結果となった。

車椅子の人が一人ではどうしてもできない階段での移動などは積極的に手伝うという生徒が多いが、清掃の場面では車椅子に乗った状態でもできることをやってもらおうと答えた生徒が一番多かつ

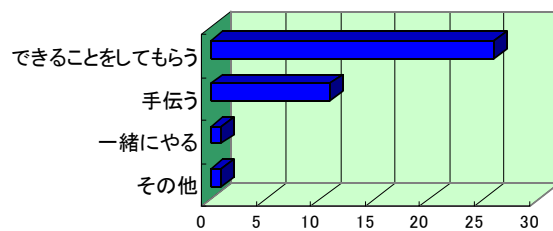
資料9 目が見えない人が困っていたら、どうするか (選択肢)



資料10 車椅子の転校生が教室移動の時どうするか (自由記述)



資料11 車椅子の転校生が掃除をするときどうするか (自由記述)



た。こうした事後アンケートからも、一方的に何かをしてあげることが思いやりなのではなく、相手が本当に困ってしまう場面で協力していくことが思いやりであると考えていることが分かる。

A男は事後のアンケートで「目が見えない人が横断歩道を渡れなくて困っていたらどうしますか」という問いに対してあいさつをすると答えて

おり、その理由を「ちょっとした声をかけるだけで目が見えない人が頼みごとをすることができるから」と記述している。さらにA男は日常の行動でも変化が見られるようになってきており、特学の生徒の給食が足りなかったときには「先生、〇〇君の給食が足りません」と言いに来て、足りない分のおかずを運んでいた。その生徒は給食が足りなくても何も言いに来ることができず、ご飯だけを食べていた。それに気付いたA男は自分から行動をとっており、その行動の理由を「〇〇君が言えなくて困っていると思ったから、困っているときには自分ができることで助ける方がいいと思った」と話した。

- ・押谷 由夫、渡邊 満、諸富 祥彦 編著 『生き生き「道徳の時間」体験活動を生かした道徳の授業』 東京書籍（2000）
- ・『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―道徳編―』 文部省（平成11年9月）

（担当指導主事 峯岸 哲夫）

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 総合的な学習の時間に体験したことを道徳1に生かしたことによって、生徒は目が見えない人の気持ちを実感を伴って理解することができ、目が見えない人の心情について深く考えることができた。

美術科の課題で取り組んだデザインを道徳2に生かしたことによって、生徒は自分と比較して考えることができ、思いやりの気持ちを実践しようとする大切さを感じ取ることができた。

- 総合的な学習の時間「太田市改造計画」と美術科の課題「君はユニバーサルデザイナー」、道徳1、2をある期間に集中して行うことにより、生徒は様々な面から思いやりに迫ることができ、継続した流れの中で考えを深めていくことができた。

また、美術科の課題や総合的な学習の時間の取組にも意欲を持続することができた。

2 今後の課題

今回は総合的な学習の時間と美術を道徳と関連づけていったが、今後は道徳の時間と他教科との関連を考えて、年間の計画を立てることが必要である。そのためには、他教科の担当教師との連携が必要であると考え。

〈参考文献〉

- ・押谷 由夫 編著 『新学習指導要領を生かした道徳の授業 No. 1』 小学館（2002）

